

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選 その96

総穀改め

文：長谷沼 清吉

会津藩では大凶作となると、各家で米などの穀物(食べ物)をどれだけ所有しているかを調べる「総穀改め」を実施しています。天保4年(1833)と慶応2年(1866)の記録が残されています。天保4年は11月23日から、他組肝煎2人と代官所役人など1人の3人で実施しています。調査はすべての雑穀まで細かく行い、隠すものがあれば当人のほか五人組や村役人まで責任を負わされました。

余分があるものからは相場で買い上げ、許可なしの売買は禁止しました。天保5年(1834)2月には山三郷各組1人の肝煎に「難渋者百姓^{なんじゆうものひやくしやういとなみかたけんぶんやく}方見聞役」を任命し、難渋(困っている)の家をまわり、餓死などのおそれがあれば衣服や米(1人2合)を貸すようにしました。

このようなこともあり、天明の飢饉^{ききん}(1782年から1788年頃にかけて起きた飢饉)では餓死者が出ましたが、天保の時は病死者は出たものの餓死者は出なかったようです。

また、慶応2年の総穀改めは12月7日から実施しました。

高目村には野沢組山口村と小荒井組第六天村(喜多方市塩川町)の肝煎、地方御家人^{じかたごけにん}の3人で、小清水に泊まり朝に高目、昼には漆窪に移り実施しました。

改めの内容は残っていませんが、木曾組中反村(喜多方市山都町)の記録が残されています。それには、米のほか大麦・小麦^{なからし}、菜芥子^{からむし}、そば、苧^{しいなもみ}、糝^{せん}、ちり粉などが書かれています。

糝粉とは良く実の入らない粉で、どのようにして食べたかはわかりませんが、天明の飢饉の時^{わら}は蕪を煎って粉にして食べたので、同じようにして食べたのでしょう。

ちり粉とはごみや屑^{くず}のことになります。当時は千歯^{せんばこ}扱きであり、唐箕^{とうみ}などの風で飛ばしたちり粉を貯えていたのでしょう。

それにしても細心の心構えで食料を確保したことがわかります。

1人1日2合5勺と見ると、年間9斗となります。中反村24軒のうち、食料を十分に保有しているのは8軒、糧物^{かてもの}(飢饉など食料がない時に食べる救荒食)を食べても不足する家は9軒ほど見受けられます。

なお、明治5年(1872)4月には漆窪村の雑穀改書出しの記録が残されています。

今月の表紙

今月の表紙は、8月15日に行われた「二十歳を祝う会」から、新成人の皆さん、おめでとうございます。



編集後記

暑かった夏ももうすぐ終わり。今までより少しだけ、風がひんやりして季節の移り変わりを感じています。

秋と言えば「食欲の秋」。焼き芋のホクホク感も良いし、サツマイモのシチューも捨てがたい！

皆さんは「食欲の秋」何で楽しみますか？

(三留)

